

KOKUGO

受賞作品 | 国語部門

〈総評〉

本年度も、「自身の考えや意見がしっかりと述べられているか」「読み手に伝えるために重要な表現力や文章構成力が各学年に応じて身につけているか」といった点に着目し、選考の基準といたしました。今年の全体的な傾向として、家族や兄弟、友人などをテーマにした作文や習い事、中学生の部活動をテーマにした作文など、身近な題材をテーマにした作文に優れたものがありました。一方で、環境問題や世界平和、AI、性的マイノリティーなど、社会問題を取り上げたテーマの作品もありましたが、テレビやインターネットの情報だけをもとにしているため、内容や展開が表面的で、思考や分析の浅い作文が多かったのが残念な点です。また、例年通りの傾向ですが、「自分自身の経験をとおして学んだことを題材とした作品」「読書をとおして思考し、それを今後自分がどう生きていくのかにつなげている作品」「嬉しさ、悲しさ、悔しさなど、自分の感情や熱い気持ちを言葉でしっかりと表現している作品」「文章のリズムがよく、ユーモアや言葉選びのセンスが光る作品」といった作品が入賞しています。ただ、全体で600作品以上の応募がありながらも、このような優れた作品は少ないです。今回、国語部門に応募してくれた皆さんが、このコンクールをきっかけとして、文章を書く力をさらに伸ばしていくことを期待します。



文部科学大臣賞

今を大切に生きるということ
東京都 江東区立元加賀小学校 4年
相川 壮一郎



子どもの文化・教育研究所 理事長賞

笑顔あふれるデイサービスセンター
静岡県 島田市立島田第五小学校 5年
梅原 里宮



一般社団法人 日本児童文芸家協会 理事長賞

「やる気」はあった方がいいの？
広島県 広島市立安佐中学校 1年
木川 遥登



中央出版株式会社社長賞

お兄ちゃんへの道
三重県 津市立戸木小学校 4年
田畑 颯希



優秀賞

まじよのナニーを読んで
愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 2年
中谷 桃子

カマキリとわたし
鹿児島県 鹿児島市立川上小学校 5年
大濱 ののは

差別との付き合い方
兵庫県 甲南女子中学校 3年
平井 凜風

今を大切に生きるということ

相川 壮一郎 | 東京都 江東区立元加賀小学校 4年

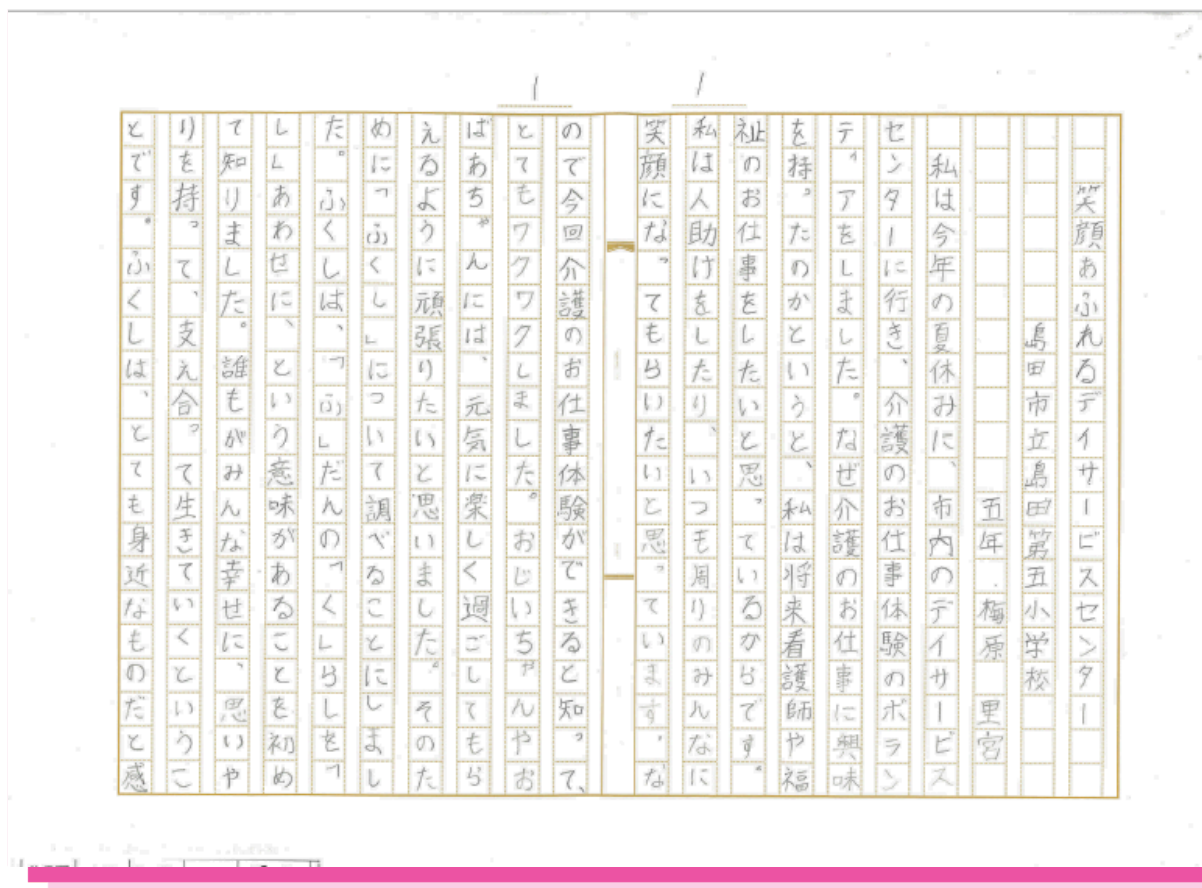


〈選考理由〉

本作品では、大好きなばあばを病気で65歳で亡くした壮一郎さん自身の実体験、大きな喪失感を抱えている時に会った『クララ先生、さようなら』の主人公ユリウス（オーストリアの国民学校4年生）と学級の友だちの物語に学んだことを語っている。働きながら一生懸命弟と自分を育ててくれたばあばに対して、壮一郎さんは「やってもらったことに対して、やってあげられたことがあまりに少なすぎ」「悲しくてつらくて、泣いても泣いても気持ちの整理がつかない」想いを抱えている。ばあばが亡くなる前に千羽鶴作り始めたが、既に意識はなく完成する前に亡くなってしまった、「病院のルールをやぶってでも会いに行きつけてあげたかった」「『大好きだよ、ありがとう』と伝えたかった」と深く悔いている。『クララ先生、さようなら』はユリウスと学級の友だちが慕っている担任のクララ先生の病（「おなかのモンスター」）とやがて訪れる死を受けとめ、心からの感謝で見送る物語である。この物語との対話を通じて壮一郎さんは大切なかけがえのない人との別れ、当たり前が続くと思われている毎日が奇跡のような日々であることを知り「一日一日を、一しゅん一しゅんを、生きていたい（略）、ばあばには毎日こう伝えたい。『ばあば、今日もありがとう。ぼくは今日も大切な人を大切に生きます』」とまとめている。誰にでも訪れる病や老い、死と残される者はどう向き合うかは非常に難しい課題ですが、壮一郎さんは身近な体験を物語の世界との関係を通して生きることの大切さ、死や病と出会う意味を考察した素晴らしい作品です。（課題図書『クララ先生、さようなら』 ラヘル・ファン・コーイ 作 石川素子 訳 徳間書店）

笑顔あふれるデイサービスセンター

梅原 里宮 | 静岡県 島田市立島田第五小学校 5年



〈選考理由〉

看護師や福祉の仕事をしたという将来の夢を叶えるため、介護の仕事体験のボランティアを通し小学校5年生の里宮さんの体験とそこから感じ学んだことが前向きに、的確にまとめられている作品です。「ふくし」の言葉が「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせに想いが込められていること、「誰もがみんなしあわせに、思いやりを持って、支えて生きていく」「とても身近なもの」というとらえ方は素晴らしいものです。当日、挨拶からラジオ体操、工作の時間、「えんげ体そう」に参加し、お昼ご飯を一緒に取るなかでおじいちゃん・おばあちゃんたちとの会話で「明るい表情とやさしい言葉からたくさんの温かさ」が伝わってきた、介護体験をして「元気とパワーをもらって、笑顔になっていた（幸せな気持ちになった）」のは私の方とも書いていますね。このように書けるのは、介護施設のスタッフさんたちのご配慮もあるでしょうが、里宮さん自身の温かさと想いが伝わったからですし、体験から学ぶ力を感じます。

これからの教育に求められているのは、小学校の段階から「学習と体験を通し自分の生き方を確かに考える力」「一人ひとりが幸せになり社会全体が幸福になること（ウエルビーイングWell-being）」にどう関わるかです。介護や福祉の仕事は奥が深く簡単ではありませんが、里宮さんの作品はこれからの私たちの生き方にも参考になるものです。

「やる気」はあった方がいいの？

木川 遥登 | 広島県 広島市立安佐中学校 1年

「やる気」はあった方がいいの？
広島市立安佐中学校一年 木川 遥登
僕は、やる気を出してなにかに取り組んだことがありません。そもそもやる気って必要なのですか？
宿題とか、やらないといけないことは、やる気がなくても取り組むことができるから、別にやる気は必要ないと思いました。そこで「やる気」とは何かをインターネットで調べてみました。すると「やる気を入れる」とか「リテ、ヤススピードがまして、同じことをやるにも効率的になる」と出てきました。これを見て、「やっぱり同じことをするのならやる気を入れてやるほうがいいな」と思いました。しかし、ここで一つ疑問が生まれました。「やる気」ってどう出せばいいの!? みなさんは、やる気を出せません。僕は、面倒くさがりな性格なので、すぐ「めんどくせー」とネガティブなことばかり考えてしまいます。しかし、

〈選考理由〉

冒頭は「僕はやる気を出してなにかに取り組んだことがありません。そもそもやる気って必要なのですか？」との問いかけから始まる。どんな展開になるか読者の関心をひきつけるが、表現上の工夫のことでなく、「面倒くさがりな性格」で「すぐ、めんどくせーとネガティブなことばかり考えてしまう」遥登さんは本気で「やる気」って何だろう？「やる気」って本当に必要？どうしたら「やる気」は出るの？と探究している過程を語った作品です。最終的には自分は自分の考えや想いで行動してきたこと、常識的な「やる気」の意味に左右されてこなかったこと、でも「決めたことはとことんまでやりきること」（お父さんの言葉）の重要性に気づいていきます。現代の教育では、こどもたちは誰でも「好きなことを見つけ楽しく学ぶ」「意欲的に前向きに学ぶ姿」「粘り強く試行錯誤しつつ大切なものや真実を発見」することが求められていますが、これはそんなに簡単ではありません。一人ひとり成長の過程では、誰でも悩みや葛藤、不安もあります。そのなかでも遥登さんのように、当たり前になっていることに「それは本当なのか？」「理由は？」と問いや疑問を持つこと、自分と向き合うことはこれからの社会を生き抜くために重要です（「ロジカル・クリティカルシンキング」と言います）。これは「常識」となっている社会や学校の生き方や考え方を問い直すことで、中学生の時期には大切なこと、そして自分らしい生き方を創っていくステップになります。遥登さんは、そのような思考錯誤の過程で多面的・多角的に実践したり、効果を検証したりと考察している様子がユーモラスに描かれています。何回か出てくる「僕は面倒くさがりな性格」との自覚も言い訳ではなく、自分を客観的に見つめて前に向かおうとの表現と読むことができます。

お兄ちゃんへの道

田畑 颯希 | 三重県 津市立戸木小学校 4年

ぼくには、お兄ちゃんもお姉ちゃんも弟を妹もいない。ぼくはいわゆるひとり子だ。ぼくは、一年生のころにコロナで会えない、たおばあちゃんと電話をした。その時、赤ちゃんのなく声のまねをして、「勇希」って名前の弟が生まれたとうそをついた。一おにいちゃんってぼくのことをよぶ勇希が本当にはいたらいのにな。いつか思っていた、ぼくはこれがいから、一人で守るべきものがこわくて、弟といっしょにいたいなと思

ている。勇気のある弟だといいたいという気持ちとぼくの名前の颯希の希を合わせて勇希という名前を考えた。ぼくに勇気をくれる弟がうちに来てほしいな。

ぼくは、市民ミコジカルに参加しているオーデイションを受け、最初のおけいこの日がやってきました。どんな役だろうとドキドキしながら会場に行きました。すると、他の場面に出る役の子たちのおけいこをしていた。ぼくは台本をもらって、自分のセリフをかん

〈選考理由〉

ひとりっこの颯希さんはある日、お稽古先で颯希さんのお母さんが赤ちゃんを抱っこしているのを見つめます。赤ちゃんはお稽古の先生のお子さんと、日頃から「もしも弟がいたら…」と夢見ていた颯希さんは、毎週末のお稽古のたび、赤ちゃんに仲良くなるためにあの手この手で奮闘します。赤ちゃんがわらって来て胸がいっぱいになったことや泣かれてショックだったこと、先生の赤ちゃんを守ってあげたいという気持ちの芽生えと、赤ちゃんに自分のお母さんを取られてしまうのではという不安が素直に描かれており、颯希さんの心の成長も伺える作品になっています。

先生のお子さんのことを守ってあげられるように、素敵なお兄ちゃんになってください。